印度々人の家庭生活（承前）

V. I.

飜へつて印度人の生活ことに家庭生活の狀態を見ますと凡ての事は皆宗教として崇られたる古き習慣によりて規定せられてゐまして之を變更するのは大變の不敬事として恐られて居ます夫で今こゝにその一斑を述べて見ますればその改良進歩のそれほど困難であるかを認めることが出來ましよう。

先づ印度の家庭は集合組織なので殊に中以上の家庭に於てそうなのです。

男兒は家庭で成長した後も其職業のため止むなく他所に轉居するものゝ外は兩親と同居するのが常なので兩親兄弟の外にも甥とか從弟などの同居することは少しも珍らしくはありません又印度人は凡て極々年少のときに結婚する風習がありますが男兒ならばまだ學校通の生徒の時女子ならば十二歳以前にするのですから男兒は結婚後多年を經ればその妻を扶助することも出來ず又妻たるものもまだ小兒ですから齊家の道を教へなければならないのでございます。

印度では富豪なる家庭に於ましても一家の主婦たるものは家事を親くなす風習でございまして若し婢僕を使用することがありましても至て少數です家事の下働きは大抵同居して居る貧乏な親戚の寡婦とか子女になさしめるのでございます。

印度の高貴なる階級の家庭の有樣は大抵かようなものでございますゝその富と人數との多少によりて少しは差がある許りです。

夫から印度人は非常に早起する人民でして婦人は日の出づる二時間前に起出て涼く快よき間に家事の重な仕事をなし終はるようにして居ます。

又家族の食料のために粉を挽くことは婦人の仕事の一つとなつて居まして二人の婦人は向ひ合つて土間に坐つて可笑うたをうたひながら重い石臼を挽いて居ます又最寄の井戸とか河から水を汲むことも婦人の務の一つですが之れは至極愉快な務でございまして、見て居ますといふと澤山な婦人は長い隊を作つて各水甕を恰好よく頭の上にのせ隊長の先導に從ひ一列になりて進んで行きますが水邊に到りますと近隣の婦人等は皆集つて來まして互に挨拶をしましてお互に耳新しい咄を持ちよつて例の井側會話をなすものもあり又冗談を云つて笑つて見たりして居ますがこれは確に一日中の最も樂しき時間の一つであるのでございます。

小兒も同じ樣に河母に伴はれて小さい水甕を携へまして之れに水を入れ大切にして家に運ぶことを大なる樂として居ます。

夫から高貴の階級の人民はまことに嚴重に清淨を好むのです、そうですから一日のうちにも洗ひ淨めることは數知ぬ程ですから其使用する水もまことに、澤山です。

又印度の婦人は同じ綿服を二日間洗はずにつづけて着ることは決してありません而して洗濯は大概家族内の婦人にさせて居ます。

この婦人達は飲用水を汲みに行く處から少し隔たつた水邊に行きまして洗濯をしまして夫から歸つて來て臺所や食堂などの拭き掃きをするのです。（未完）